

活動報告 2 特別研究員・客員研究員

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://kcua.repo.nii.ac.jp/records/340

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



■ 菌田 郁「近代日本の語り芸と人形芝居に関する研究——地方における大衆芸能生成の視点から」

本年度は、昨年度と同じ課題を元に、さらにそれを発展させるために近代の大衆的な人形芝居を対象としつつ、より広い地域（福島、秋田、宮城、高知、香川、広島など）で現地調査を実施した。現地調査では、興行活動、上演形態に関わる資料の収集、聞き取り調査を行い、それらをもとに、前年より考察対象を広げて比較研究のための準備的考察を進めた。なおこれらは科学研究助成事業における研究課題（2018 - 2021 年 課題番号：18K12230）としても行ったものである。以下、研究対象とした活動人形、西畑人形、説教源氏節の三つの事例に基づき、活動報告を記す。

活動人形については、これまで調査が十分に出来なかった興行活動に関する具体的資料を収集する調査を行った。福島県立図書館、宮城県図書館、また国立国会図書館で資料調査を行い、各地域で行われた祭礼のなかに興行記録を多く見出すことが出来た。これにより、これまで巡業日誌や聞き取り調査によって東北地方の限られた地域や、おおまかな興行範囲でしか捉えられてこなかった興行活動の具体的な活動内容の一端が明らかとなった。一方、興行活動に関わっていた人物（安田春子氏）へも聞き取り調査を行うことができ、上記の興行記録とは異なる興行活動の全国的な展開についての裏付けとなる情報を得ることができた。これらの一部の成果は、本年度刊行された論文にも反映されている。

西畑人形については、高知県春野郷土資料館に所蔵されている西畑人形に関する一次資料の調査を前年度に引き続き行った。興行活動に関わる資料については、主に演者同士でやりとりされたハガキの一部を整理・検討し、具体的な興行の地域、興行のやりとりなどを確認することが出来た。一方、音源資料は所蔵する国立民族学博物館において調査を実施し、資料の一部に西畑人形に関わった演者が浪曲（浪花節）以外にも複数の関連するジャンルに関わっていることを確認することが出来た。また台本資料と現地調査で得た音源資料を基に、上演形態の分析を行った。この成果の一部は今後論集として発表される予定である。

説教源氏節については、主に広島廿日市において現地調査を行い、台本資料（主に詞草本）、および音源資料の調査を実施した。詞草本については、名古屋など複数の地域での調査もを行い、詞草本に記載されたフシ譜についての整理および考察を行った。音源調査については、廿日市の資料の他、大正期の SP 音源などを用いて説教源氏節の語りの音楽構造について分析を行った。また前年度の興行活動に関する研究成果を踏まえ、興行活動と上演形態との結びつきについて考察を行った。

今後は上記の各地域の研究対象を深めつつ、それぞれで得られた研究成果をもと、比較研究を進めていく予定である。

◆関連する執筆

- * 2018.6 論文「明治中後期における源氏節の興行活動の拡がりとそのあり方——東海地方を軸に」、『日本伝統音楽研究』、第 15 号、日本伝統音楽研究センター、pp.41-50。
- * 2019.3 論文「活動人形とその担い手——横断する近代の地方芸能」、『比較日本文化研究』、第 19 号、pp.76-95、比較日本文化研究会。
- * 2018.7.17 解説「企画展『小泉文夫とシルクロードの音楽』 関西の音と人、『大阪日日新聞』、7 面。

- * 2018.8 解説「民衆とともに生きた人形芝居——猿倉人形と西畑人形」、いいた人形劇フェスタ 2018 特別企画展示「こんなにすごい人形芝居があった」リーフレット、p.2。
- ◆講義・講座等
- * 2017.4-2018.3 日本伝統音楽演習 d I・II・III・IV
- * 2018.6.22 平成 30 年度第 9 回伝音セミナー「説教節を聴く」日本伝統音楽研究センター
- ◆資料・調査など
- * 2018.9.10-2018.9.11 広島県廿日市市、原民俗資料館に

- て説教源氏節に関する調査（広島県廿日市）
- * 2018.8.17-8.19, 福島県立図書館、および秋田県羽後町にて猿倉人形の上映記録、および資料調査
 - * 2018.10.6-10.8 岩手県一関市赤荻にて宮城県図書館活動人形に関する資料調査

- * 2018.11.25 岐阜県大垣市にて、聞き取り調査インタビュー
- * 2018.3.16-17 * 高知県高知市春野町、春野郷土資料館にて西畑人形に関する現地調査。
- ◆ 対外活動
- * 2018.9-2019.3 畿央大学 非常勤講師

竹内 直 「日本の作曲における伝統音楽と創作との関わり——松平頼則の創作を事例として——」

本年度の研究課題については、報告者の近年の主たる調査・研究対象である作曲家松平頼則（1907-2001）に関する資料調査・研究を引き続き行った。先年度は、松平の昭和初年の創作活動と東北民謡との接点に関して調査・研究を行い、その活動の一断面について素描したが、本年度は戦中から戦後初期にかけての手稿譜、出版譜、執筆活動などに関する資料調査が中心になった。全ての資料が公開されているわけではないという事情もあり、この時期の創作に関してはテキストに踏み込むまでの詳細な検討が進まなかったことは残念であったが、収集することができた資料の精査を含め、次年度以降の報告者自身の課題としたい。

つぎに本研究センター内での活動を報告する。該当年度は白井史人（日本学術振興会特別研究員）、長門洋平氏（京都精華大学）をゲストに、映画と伝統音楽との関わりをテーマとした「無声映画からトーキー映画初期——伝統音楽との関わり」（平成30年度伝音セミナー第5回）を担当した。新しいメディアであった映画に入り込んだ伝統楽器の音や語法に関して、無声映画における伴奏音楽の復元経験などを踏まえた詳細な発表（白井氏）、トーキー映画初期の「日本的」な要素に関する考察（長門氏）、昭和初期の洋楽の作曲家にみられる「邦楽的」要素に関する素描（報告者）という内容で進めたが、時間が足りず討議が不十分に終わってしまったことは反省点である。最後に、本セミナーは齋藤桂氏（本研究センター講師）の共同研究「近現代の伝統音楽および民謡の変容と実践」の一環として開催される運びとなった。ご尽力いただいた齋藤氏には記して御礼を申し上げたい。

◆ 関連する執筆

- * 2018.6.30 論文「松平頼則の《南部民謡集》をめぐる——採譜と創作のはざままで——」、日本伝統音楽研究センター紀要『日本伝統音楽研究』第15号、1-17頁
- * 2018.9.1 解説「深井史郎：架空のパレエのための三楽章・早坂文雄：ピアノ協奏曲・小山清茂：《弦楽のためのアイヌの唄》・伊福部昭：《シンフォニア・タブカーラ》」東京交響楽団『Symphony』10月号、12-15頁
- * 2018.10.29 解説「松平頼則：《幼年時代の思い出》・組曲《美しい日本》ほか」『谷口敦子ピアノリサイタル～松平頼則と彼に影響を与えた作曲家達～』パンフレット、ザ・フェニックスホール
- * 2018.11.8 解説「はじまりの風景を訪ねて」『奈良ゆみソプラノリサイタル 若き日の松平頼則～フランスへの憧れ～』パンフレット、JTアートホールアフィニス
- * 2019.3.31 共編著『植民地における近代音楽の帰属意識——東アジアとオーストラリアの芸術歌曲の場合——』平成27～30年度科学研究費助成金研究成果報告書

◆ 講義・講座等

- * 大学院音楽研究科：日本伝統音楽研究 f I・II・III・IV、音楽学特殊研究 m II・IV
- * 音楽学部：音楽学特講 m
- * 2018.11.1 平成30年度伝音セミナー第5回「無声映画からトーキー映画初期——伝統音楽との関わり」（ゲスト：白井史人氏・長門洋平氏）
- * 2018.4-2019.3 奈良教育大学非常勤講師（「音楽史Ⅰ（西洋音楽史）」「音楽理論」「音楽学概論」）

◆ 資料調査

- 2018.8.22-24 上野学園大学図書館資料調査、明治学院大学図書館付属遠山一行記念日本近代音楽館
- 2018.11.8-9 上野学園大学図書館資料調査、東京文化会館音楽資料室資料調査

◆ その他

- * 2018.7~2019.1 企画「ドビュッシーと松平頼則 エチュードを読む・ピアノリズムの交錯Ⅰ-Ⅲ」

出口 実紀 「近世の雅楽譜における記譜の特徴と系統に関する研究」

本研究は近世の雅楽譜を対象に仮名で記された唱歌譜の特徴を整理し、各楽家の記譜の特徴と系統を明らかにしようとするものであり、今年度は笛譜を中心に研究をおこなった。江戸時代、横笛を主業とする楽家は、京都方の山井（大神）家、多家、奈良方の芝家、上家、奥家、天王寺方の岡家であった。中でも、明治3年（1870）、明治9年（1876）、明治21年（1888）に撰定された「明治撰定譜」では、奈良方の笛譜が採用されたとある。しかし奈良方の中でも笛を主業とする家は複数あるため、どの楽家の譜が採用されたのかを明らかにするため、各家の譜の特徴を整理し、本家・分家、居住地などの情報を手がかりに記譜の系統を探ることにした。今年度の途中からは公益財団法人戸部眞紀財団の研究助成を受けて、宮内庁書陵部、国立歴史民俗学博物館等における雅楽譜の所蔵調査および複製収集に取りかかった。現在、収集した楽譜の書誌情報を整理し、記されている唱歌譜の分析を進めている。その他の研究活動では、岐阜県、京都府、奈良県、和歌山県における民俗芸能調査の調査員を務め、各地での祭礼、民俗芸能、年中行事等の調査をおこなった。

当センター開催の平成30年度第9回伝音セミナーでは、「国際文化振興会レコードの「俚謡」を聴く」というテーマで九州大学総合博物館専門研究員の久保真利子氏と共に民謡レコードに関するセミナーを実施した。セミナーでは、昭和19年（1944）に国際文化振興会が作成した5巻60枚におよぶSPレコード集『日本音楽集』の「俚謡」（民謡）部分をとりあげ、KBSレコードの位置づけをおこなうとともに当時の民謡レコード、他の民謡事業との比較を試みた。久保氏からは、KBSレコードの編集委員であり民謡研究家の町田嘉章（1888～1981）が遺した解説書原稿を手がかりにKBSレコードの演唱者の特定をおこない、KBSと同時期に市販されていた民謡レコードの動向との比較によってKBSレコードの特徴が提示された。筆者は町田が手がけた他の民謡調査および事業を対象として、KBSレコードと『復刻 日本民謡大観』（日本放送協会）に添付されているCD音源との比較を試みた。CDと共に添付されている解説書には演唱者、収録年月日、収録地などの情報が記載されており、これらの情報と久保氏が町田の遺稿によって特定した演唱者情報とを照合させ、音源が一致する曲については演唱者や録音年等の情報を明らかにした。

◆講義・講座等

* 大学院音楽研究科：日本伝統音楽演習 e I・e III、e II・e IV

* 2019.02.07 平成30年度伝音セミナー第9回「国際文化振興会レコードの「俚謡」を聴く」

◆現地調査等

* 2018.04 大阪府八尾市にて常光寺大般若会調査

* 2018.05 京都府与謝野郡与謝野町にて笹囃子調査
大阪市平野区にて大念仏寺万部おねり調査

* 2018.05 和歌山県有田市にて得生寺二十五菩薩来迎会式調査

* 2018.10 和歌山県御坊市にて祭礼調査

岐阜県揖斐郡揖斐川町にて祭礼調査

* 2018.12 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて年中行事調査

* 2019.01 岐阜県揖斐郡揖斐川町にて年中行事調査

* 2019.02 広島県立歴史博物館にて雅楽資料調査

◆関連する研究助成

* 公益財団法人戸部眞紀財団平成30年度研究助成 研究課題「近世の雅楽譜における記譜の特徴と系統に関する研究——奈良方の笛譜を中心に」（2018年9月1日～2019年8月31日予定）

大西 秀紀 「平成 30 年度伝音セミナー使用曲」

平成 30 年度の「伝音セミナー 日本の希少音楽資源にふれる (全 9 回)」において、報告者は第 4 回を担当した。その内容は次の通りである。

○第 1 回 京都のうた (その 4) 2018.09.06

「京都のうた」の 4 回目は、「第三高等学校逍遙歌」「京都府立第三中学校 (現・府立山城高) 校歌」「同志社大学校歌」「立命館大学校歌」など京都の学校関係のレコードをはじめ、河原町三条角にあった日本録音文化協会 (NRBK) 制作の「火の用心」「上鴨子供の歌 春はさんやれ」「大枝音頭」、大正 15 年発売の宇治検番芸妓連中による「茶摘踊」などをお聴き頂きます。(広報チラシより)

 (使用した音源)

- 1 京都府立第三中学校々歌 斉唱 本校生徒
ニッター委託盤 (番号なし・昭和 7-9 年頃制作カ)
- 2 三高歌 逍遙の歌 唄 第三高等学校生徒有志
タイハイ M1623 (昭和 10 年代制作)
- 3 京都帝国大学学歌 合唱 京大合唱団
テイチク特 277 (昭和 15 年 4 月制作)
- 4 同志社大学校歌 (カレッジソング) 合唱 同志社混声
合唱団
ビクター 50785-A (昭和 4 年 7 月新譜カ)
- 5 同志社大学歌 唄 同志社グリークラブ
DRAC D1-B (昭和 26-8 年制作カ)
- 6 立命館大学校歌 唄 ヴォーカル・アンサンブル
コロムビア A56-A (昭和 6 年制作)
- 7 俚謡 茶摘踊 唄 (宇治検番) 芸妓連中
オリエン 3312 (大正 15 年 1 月新譜)
- 8 上鴨子供の歌 春はさんやれ 唄 小林美どり、伊藤

- 明子、山中みち子、村井明子
日本録音文化協会 H1031-A (昭和 30 年頃制作カ)
 - 9 大枝音頭 演奏者不詳
日本録音文化協会 番号不詳 (昭和 28 年制作カ)
 - 10 大枝音頭 演奏 京都市立芸術大学音楽学部
大枝学区自治連合会制作 CD (平成 22 年 6 月制作)
 - 11 火の用心 独唱 上土生裕美、合唱 京都市立朱雀第四
小学校合唱団
日本録音文化協会 H977-A (昭和 30 年頃制作カ)
 - 12 秀岳音頭 唄 里園志寿枝、三 里園志寿琴、志寿清
日本録音文化協会 H2124-A (昭和 31 年制作カ)
 - 13 京都市市民憲章の歌 講演 京都市長 高山義三
日本録音文化協会 H2124-B (昭和 31 年制作カ)
 - 14 混声合唱 京都市歌 京都市立堀川高等学校音楽専攻
並ニ音楽コーラス
テイチク P-74 (昭和 26 年制作)
-

◆関連した執筆

- * 2018.04 「東洋蓄音器 (オリエントレコード) の社史調査とディスコグラフィの作成」、京都市立芸術大学リポジトリ (Web 公開)
- * 2018.06 「楽語荘発行のレコード」『大阪府立上方演芸資料館 平成 29 年度年報』、大阪府立上方演芸資料館

◆関連した口頭発表

- * 2018.06.24 「五代目笑福亭松鶴の天王寺詣り」、大阪芸能懇話会、大阪市立難波市民学習センター

高橋 葉子 「謡伝書と謡技法の歴史的研究」

1、科学研究費助成事業研究（基盤研究 C）「能の略式演奏の歴史と現在——新しい演出形態を構想するために」（平成 28～30 年度。研究分担者藤田隆則）の活動として、30 年度は主に以下の 4 点を行なった。①口頭発表「一調の歴史的考察 序説」（東洋音楽学会第 69 回大会）。一調は能の略式演奏の一種で、打楽器（小鼓大鼓太鼓）のいずれか一種類と謡とで能の一部を演奏するものである。室町末期には臨機応変に演奏される余興的な演目だったが、現在では手組や曲目が定められた格式の高い習物となっており、その変容の過程には、独吟か助吟付か、大夫が謡うべきか否か、謡が主か囃子が主か等、様々な争点があった。発表では一調の形態と演奏理念の歴史の変遷を明らかにし、その背景にある能の歴史的な職掌構造を明らかにした。②口頭発表「謡のふしの変遷——『京観世』岩井派大西新三郎の音源に聞くウキのふし」（楽劇学会第 100 回例会）。大正期に淘汰された「ウキ節」が保存された音源（謡大西新三郎。大西秀紀氏提供）を紹介し、江戸後期の観世流の謡と岩井派の特徴について発表した。当日の発表を補訂した資料紹介稿を本紀要に掲載した。③論考発表「『謡曲秘伝書』と常磐会謡本——残された岩井派の謡」（武蔵野大学能楽資料センター紀要、第 30 号）。岩井派大西家から大正初期に出版された『謡曲秘伝書』は、観世流統一以前の古い謡い方をとどめる書物として「京観世の記録化」研究会（2013 年度終了）でも注目してきた資料である。発表稿では、法政大学鴻山文庫蔵の『大西閑雪翁謡話録』が『謡曲秘伝書』と大西家常磐会謡本の草稿であることを明らかにした。また、『謡曲秘伝書』の記事のうち現行の観世流と異なる点をほぼ網羅し、同流統一前の大正期の謡の実態を考察した。④論考発表「謡の極意——拍子の秘事」（神戸女子大学古典芸能研究センター紀要、第 12 号）。神戸女子大学古典芸能研究センター「師伝書研究会」に参加し、ワキ方福王流江崎家旧蔵の謡伝書『師伝書』の読解報告として江戸後期の地拍子に関する論考を発表した。同書は広島で謡教授を行った風叟なる人物の弟子が、師の没後の安永年間にその教えを書き著したもので、実際の教授の場を彷彿とさせる個性的な言葉を通じて当時の謡の価値観が述べられ、謡技術の体系化が試みられている点で注目すべき伝書である。発表稿では同書に記載の地拍子の「難所」を解説し、謡と拍子の「嵌らず潤びず」という不即不離の関係が理想とされていることを明らかにした。結果的に当時と現代との拍子当たりの変化例も明らかになった。

本年度は以上のように、能の略式演奏の最も大きなジャンルである謡に関して伝書・技法研究を進めたが、家族能など愛好家の活動記録の報告が遅れることになり、科研費研究を延長して新年度に報告書を作成することとした。

2、プロジェクト研究「音曲技法書（伝書）の総合的研究」（代表者藤田隆則）では、伝書講読部会において室町末期から江戸初期にかけての謡伝書『野曲密伝』『音曲口伝』『うたひ鏡』の講読を行った。また 9 月全体会で「謡にとって地拍子とは何か」、3 月全体会で「唱歌に求められるもの」をテーマに口頭発表を行った。前者では「三ツ地謡」の上の句と下の句のリズムの違いが現代式地拍子で決定的になり、これが謡の表現力に欠かせない条件となっていることを指摘した。現代の謡の重要な技法である三ツ地謡の発生とこれに対応する囃子の技法の発展については未だに不明の点が多い。謡・囃子伝書の用語と用法の整理解説を新年度から行う予定である。3 月の発表では〔盤渉早舞〕の唱歌譜の歴史的比較を行い、能管の唱歌譜の基本的機能について提起した。

◆関連する執筆

* 2018.06 「謡の極意——拍子の秘事」（神戸女子大学古典芸能研究センター研究会報告「江崎家旧蔵謡伝書『師伝書』を読む」）『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第 12

号

* 2019.03 「『謡曲秘伝書』と常磐会謡本——残された岩井派の謡」『武蔵野大学能楽資料センター紀要』第 30 号

◆その他の執筆

* 2018.10 書籍紹介「金春の能〈上〉中世を汲む」『紫明』第43号

◆口頭発表

* 2018.9 「謡のふしの変遷——「京観世」岩井派大西新三郎の音源に聞くウキのふし」楽劇学会第100回例会

* 2018.11 「一調の歴史の変遷 序説」東洋音楽学会第69回大会

◆解説・ワークショップ

* 2018.8 「FM 能楽堂」解説 NHKFM 放送

* 2018.11 武漢音楽学院主催による国際交流企画「長江の調べ（長江之韻）」におけるワークショップ（講師藤田隆則）と公演

◆共同研究

* 科学研究費助成事業 基盤研究（C）課題番号 16K02245 研究課題「能の略式演奏の歴史と現在——新しい演出形態を構想するために」：研究代表者（研究分担者藤田隆則）

* 科学研究費助成事業 基盤研究（C）課題番号 16K02336 研究課題「能楽離子太鼓方観世流に見る伝授と受容の諸相——『入門者摘録』研究」：研究協力者（研究代表者三浦裕子）

* 成城大学民俗学研究所共同研究事業「浅野太左衛門家旧蔵資料の総合的研究」：研究協力者（研究代表者大谷節子）

丹羽 幸江 「能の室町期の楽譜研究と復曲」

1、「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」

現在、研究課題「創生期の能の音楽における歌詞の伝達に適した旋律法」（科学研究費基盤 C、平成 30 年度～令和 2 年度 課題番号 18K00133）に取り組んでいる。能は 14 世紀においてわが国初めての本格的な舞台芸術として成立した。それまで屋外の劇場で多数の観客を相手にする語り物芸能は少なく、能は劇場空間で観客に物語を的確に伝えるための旋律法を独自に編み出す必要があったと予想される。おそらく既存の諸芸能から音楽的要素を継承しつつ、新機軸を打ち出したとの推測のもと、現在は廃絶したものの楽譜が多数残る早歌や、語り物芸能の源流と言われる声明の講式といった先行芸能との楽譜等の比較分析により、能が編み出した旋律法を明らかにするのが本研究の目的である。

創生期の能の旋律法について知るためには能を大成した世阿弥の自筆譜の解説が欠かせないが、世阿弥自筆譜は現在までほとんど着手されていない。備忘録的なカタカナ書きの詞章に意味不明な略号が付された楽譜は、それ以降の能の記譜法とは一見して異質であり、解明が遅れてきた。本研究ではまずは、世阿弥の女婿であり、世阿弥の一代あとの能役者金春禅竹の自筆譜に取りかかることで、世阿弥自筆譜への足がかりを得ようと考えた。

30 年度にはまず、資料の収集と金春禅竹の自筆譜のリズムの記譜法の解明に取り組んだ。禅竹自筆譜と先行芸能の早歌の楽譜との比較を行い、リズム面での影響関係が見いだされた。早歌が八拍を一単位とする地拍子体系を持ち、能の八拍子の母胎となったことは先学により明らかにされてきた。禅竹自筆譜では、早歌のようにわかりやすく奇数拍に朱点を打つことはないものの、「振り」という歌詞を延ばす拍を示す記号によって、早歌のリズム表記法を踏襲し、八拍子の枠組みを示していることが明らかになった。現在の記譜法における振りは、金春流でも観世流でももっぱら旋律的な記号となっているが、禅竹自筆譜においては、明確にリズム表記として摂取されていた（東洋音楽学会第 63 回全国大会、30 年 11 月口頭発表）。

つづいて、藤田隆則教授主催の研究会において、「謡の旋律パターンと早歌の旋律パターン」について、七五調の拍子に合う部分での早歌の旋律が、謡の旋律の原則と明確に異なる場合があることについて発表を行った（31 年 3 月）。

令和元年度には、これらの結果を踏まえ、室町期の旋律について分析を深めていく予定である。

2、能の復曲《虎送》

番外曲《虎送》の復曲上演に参加し、節付の復曲にたずさわった。《虎送》は曾我物語の名場面、山彦山での別れをテーマとする曲である。源頼朝の巻狩りでの仇討ち決行をついに決意した曾我祐成が、恋人である遊女虎御前を宿まで送っていくという別れのしみじみとした名場面を、能は独自に脚色を加えている。すなわち祐成の弟、

十郎時致が後を追って来、三人での別れの宴となるというものである。

《虎送》の諸伝本のうち、江戸初期の石田少左衛門盛直節付本（以下、石田本と略す）を底本とした。この謡本は、江戸期に主流となった元和卯月本の記譜法体系を正しく継承した謡本であるため、旋律の骨格がはっきりとわかりやすいという利点を持つ。通常、番外曲は節付の由来の不確かな謡本である場合も多いが、石田本に当該曲が含まれたのは幸運であり、旋律構造を容易に知ることが可能になった。別れのテーマを節付面から深めるため、過度の跳躍進行や装飾過多を避け、平易かつ穏やかな旋律で詞章が明確に伝わることを心がけた。

能楽師加藤眞悟氏によって平塚市文化財団主催の湘南ひらつか能狂言第7回にて上演された（31年2月）。

◆関連する執筆

* 2019.2 謡本『復曲《虎送》』伏木曾我復曲検討会（加藤眞悟、丹羽幸江、伊海孝充）、檜書店。

◆関連する口頭発表

* 2018.11 「金春禅竹の記譜法」東洋音楽学会第69回大会、大正大学。

* 2019.3 「謡の旋律パターンと早歌の旋律パターン」、藤

田隆則教授主催の研究会「音曲技法書（伝書）の総合的研究」。

◆上演プロデュース、口述活動

* 2019.1.26 湘南ひらつか能狂言第7回「虎送」節付復曲担当、および当日の解説「《虎送》の見どころ」、平塚市市民公会堂。

神津 武男 「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」

本年度の日本伝統音楽研究センターでの活動は、第一には前年度を以て定年退官された山田智恵子先生（本年度は客員講師）との共同研究とその内容を、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センターが主催する「平成30年度でんおん連続講座」において、2018年12月8日（土）・9日（日）の2日間に、「三味線古譜で迎える義太夫節の音楽 — 『本朝廿四孝』四段目切「十種香の段」を例として —」と題して、成果発表を行ったことである。

山田智恵子先生が研究代表者を務められた①科学研究費補助金・基盤研究（B）「人形浄瑠璃文楽の音楽学的復元上演に関する基礎的研究」（2012—2015年度。研究課題番号24320042）、および②ポーラ伝統文化振興財団助成事業採択課題「義太夫節 伝承を失った曲の復元研究とその展開」（2016—2017年度）の成果を引き継ぎ、これを発展させることを主旨として、本年度においても研究会を開催した。なお本年度は②では研究協力者として参加された太田暁子氏が研究代表者、山田先生・神津が研究協力者として、③ポーラ伝統文化振興財団助成事業採択課題「義太夫節 江戸時代の三味線古譜に基づく伝承の音楽学的研究」（2018年度）の課題に取り組んだ。

当該研究課題では、人形浄瑠璃文楽が伝承を失った演目・場面を、近年新たに所在の判明した史料群（配役書入本）に残る楽譜「三味線譜」を活用して、国立劇場の文楽公演でも復活されずにきた段・場面の復元を試みた。前記課題では断絶曲を扱ったが、当該研究課題では伝承曲を対象として、現行曲と三味線譜の古史料とを比較考量して、過去と現在の演奏との変化の有無、伝承の実態の解明に取り組んだ。具体的には、明治期に採譜されて一曲まるごとの五線譜が残る『本朝廿四孝』四段目切「十種香」（現行文楽の段名では、前半十種香、後半狐火）を取り上げた。結論としては、3代野沢語助の演奏（五線譜）に古型を認め、現行曲は明治期の竹本撰津大掾の影響によって変化したところがあるもの、と捉えることが出来た。

また下記に示す論文において、以前に作成した「浄瑠璃本『仮名手本忠臣蔵』各段の段名と、作中設定時間・場所一覧」を再録しつつ、『仮名手本忠臣蔵』の各段が何年何月何日と設定されたものなのか、その解釈と判断する理由について詳述した。前記の表は、竹本駒之助師・鶴澤津賀寿師が『仮名手本忠臣蔵』九段目切「山科隠家」を丸一段で演奏した2015年の二公演に際して、筆者が解説資料に作成したものを基礎とする。（1）2015年2

月 21 日 (土)・22 日 (日) KAAT 竹本駒之助公演第四弾『仮名手本忠臣蔵』九段目切「山科隠家の段」(KAAT 神奈川芸術劇場)。(2) 同年 11 月 28 日 (土) 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター第四十三回公開講座「義太夫節の精華——竹本駒之助 九段目を語る——」(京都市男女共同参画センター・ウィングス京都)。(2) の公演記録映像 DVD『義太夫節の精華 竹本駒之助九段目を語る』(京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター、2016 年 6 月 30 日) に添付する解説資料にも同名の付表を記載したところであるが、一部異なる点がある。下記の論文を以て、筆者の現在の見解としたい。なお筆者が研究代表者を務めた科学研究費補助金・研究活動スタート支援「人形浄瑠璃文楽の近世後期上演記録データベース更新に係る追補的資料研究」(2016—2017 年度。研究課題番号 16H07120) で、書誌調査を進めた西村公一氏所蔵の浄瑠璃本『仮名手本忠臣蔵』初板七行本の年記の左に「十月五日本出」との墨書があり、本作初板本の刊行日が、寛延元年(1748)8月14日の初日から数えて、10月5日はまさしく50日目であったと判明した。下記論文において新たに報告したところである。

市川三郷町歌舞伎文化資料館(山梨県)、姫路文学館(兵庫県)、人形劇の図書館(滋賀県)、西村公一氏(大阪府)において人形浄瑠璃関係資料の所在および書誌調査を行うとともに、ほかに大阪音楽大学楽器資料館(大阪府)を加えて、資料のデジタル撮影を進めた。人形浄瑠璃関係者の墓碑調査としては、川崎大師(神奈川県)、林昌寺(大阪府)、太宗寺(東京都)を訪問した。

◆関連する執筆

* 『仮名手本忠臣蔵』の作中時間設定について(『近松研

究所紀要』第29号、園田学園女子大学近松研究所、2019年3月所収)。

前島 美保 「歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究」

本研究は、近世から近代にかけての歌舞伎囃子を伝える劇書と伝書を調査・収集し、既出史料の見直しと新出史料の検討を通じて、歌舞伎囃子の史料研究の基盤を整備し、伝承のあり方を考察することを目的とする。2016年度より科学研究費基盤研究(C)の助成を受け研究を進めているが、最終年度となる2018年度は『三芝居楽屋雑書』(国立国会図書館、2冊)および「新梓 猿若年代記」(架蔵他)の関連史料の収集と検討を中心に、本研究のまとめとして、解題と翻刻を付した報告書を作成した。

国立国会図書館には、『三芝居楽屋雑書』なる書名の写本が二冊存在する(請求番号147/119(甲本)、228/205(乙本))。甲本は外題・内題に「三芝居楽屋雑書」、奥書に「天保六未年仲夏写之 八橋堂」とあり、天保六年(1835)五月成立と知られる(八橋堂については不詳)。内容は「三芝居年中行事」「稽古の次第」「年代記」「古来囃子外座附名目大略」「中古達人唄三弦囃子方名目」等から成り、ところどころルビに朱筆の書き込みが見られる。一方、乙本は内題に「三芝居楽屋雑書」、奥書に「八橋主人著 終」とあり、項目は概ね甲本に等しい。書写内容から推測すると、乙本は甲本あるいはその類本の転写本である可能性が高い。『三芝居楽屋雑書』については、望月太意之助が『歌舞伎下座音楽』(1975年)にて部分翻刻したのが早く、その後、福田路子が『歌舞伎における鳴り物の研究(上)』(1996年)で鳴物につき言及したことがあるが、これまで書誌等の詳細に関しては不詳であった。

また以上とは別に、「改正 役者年曆珍重記/新板 三芝居楽屋雑書」という両面一枚摺が存在する(個人蔵、東京国立博物館)。内容は甲本に酷似するが、一部異同が確認され(「篠笛入」→「竹ふへ入」等)、奥書の代わりに「並木舎校」等とある。西沢一鳳軒(1802~1853)の『伝奇作書』にはこの一枚摺の部分翻刻および解説があるが、瀬川如臯作とする根拠は定かでない。先の甲本と一枚摺との関係もよくわからないが、いずれもその基

となる原本の存在が示唆される。さらにこれらの内容は、三升屋二三治（1784～1856）の『賀久屋寿々免』（弘化2年（1845））との共通部分を見出すこともできる。

一方、「新梓 猿若年代記」も一枚摺の印刷物で、「安政五戊午」とあることから成立は安政5年（1858）と知られる。作者は幕末から明治初期の戯作者・傭書家、山閑人交来（1819～1882）。本史料も最前の『三芝居楽屋雑書』や「改正 役者年曆珍重記／新板 三芝居楽屋雑書」、『賀久屋寿々免』等と同じ項目が記載され、場合によっては内容が増補される。

以上、今年度検討した各史料の相互には関連性が見られ、このことから狂言作者や芝居関係者らが書き写すなどして共有していた芝居道の知識の蓄積を垣間見ることができる。その中には歌舞伎囃子に関する項目が備わっていたことも改めて注目しておきたい。ただし各史料の影響関係等の詳細な検討は、今後の課題として残った。

◆関連する執筆

* 2019.03 報告書『歌舞伎囃子に関する劇書・伝書の研究——解題・翻刻——』、歌舞伎囃子に関する劇書・伝書研究会（前島美保・土田牧子・鎌田紗弓・木岡史明）編集

* 2019.03 論文「江戸中期上方歌舞伎の囃子名目とその用法——『歌舞伎台帳集成』および劇書を手がかりに——」、『東京藝術大学音楽学部紀要』第44集